

日蓮大聖人御書全集

ぜんむいしょう

善無畏抄

ぜんむいしょう

# 善無畏抄

けんじがんねん  
建治元年('75) \*

善無畏三藏は、月氏烏萇奈國の仏手王の太子なり。七歳に

して位に即き、十三にして国を兄に譲り、出家・遁世し、

五天竺を修行して、五乗の道を極め三学を兼ね給いき。

達磨揃多と申す聖人に值い奉つて真言の諸の印契

一時に頓受し、即日に御灌頂し、人天の師と定まり給いき。

鷄足山に入つては迦葉尊者の髪をそり、王城において雨を

祈り給いしかば、觀音、日輪の中より出でて水瓶をもつて

かくのごとくいみじき人なれども、一時に頓死してあり

水を灌ぎ、北天竺の金粟王の塔の下にして仏法を祈請せし  
かば、文殊師利菩薩、大日經の胎藏の曼荼羅を現して授け  
給う。その後、開元四年丙辰に漢土に渡る。玄宗皇帝これ  
を尊ぶこと日月のことし。また大旱魃あり。皇帝、勅宣を  
下す。三藏、一鉢に水を入れ、しばらく加持し給いしに、水  
の中に指ばかりの物有り。変じて龍と成る。その色赤色な  
り。白氣立ち昇り、鉢より竜出でて虚空に昇り、たちまち  
に雨を降らす。

き。蘇生して語つて云わく「我死につる時、獄卒来つて鉄の縄七筋付け、鉄の杖をもつて散々にさいなみ、閻魔宮に到りにき。八万聖教一字一句も覚えず、ただ法華経の題名ばかり忘れざりき。題名を思いしに鉄の縄少しき許りぬ。息続いで高声に唱えて云わく『今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人のみ、能く救護をなす』等云々。七つの鉄の縄切れ碎け、十方に散ず。閻魔、冠を傾けて南庭に下り向かい給いき。

こんど いのちつ

かえ

かた

たま

今度は命尽きずとて帰されたるなり」と語り給いき。

今、日蓮、不審して云わく「善無畏三藏は先生に十善の  
戒力あり。五百の仏陀に仕えたり。今生には、捨てがたき

おうい 唾 捨 す  
かいりき い せんむいさんぞう せんじょう じゅうぜん

王位をつばきをすつるがごとくこれをすて、幼少十三に  
おうしょうじゅうざん

唾

捨

捨

巡

ようしゅう

なら

きわ

して御出家ならせ給いて、月支國をめぐりて諸宗を習い極

こしゅつけ

たま

がつしこく

巡

しょしゅう

なら

きわ

め、天の感を蒙り、化導の心深くして、震旦國に渡つて

てん かん

こうむ

けどう

こころふか

しょしゅう

なら

きわ

真言の大法を弘めたり。一印一真言を結び誦すれば、過去・

げんざい むりよう つみめつ

なん とが

えんま

じゆ

現在の無量の罪滅しぬらん。何の科によつて閻魔の責めを

こうむ たま

ふしんきわ な

ぜんむいさんぞう

しんごん

ば蒙り給いけるやらん。不審極まり無し。善無畏三藏、真言

の力をもつて閻魔の責めを脱れずんば、天竺・震旦・日本  
等の諸国の真言師、地獄の苦を脱るべきか」。

いさい  
かんが  
さんぞう  
せけん  
きょうざい

み  
ぎよ  
しょしゅう  
しんごん  
ちから  
めつ

せ  
べつ  
ゆえな  
ほけきようひぼう  
つみ

いさい  
かんが  
さんぞう  
せけん  
きょうざい

み  
ぎよ  
しょしゅう  
しんごん  
ちから  
めつ

は身に御せず。諸宗ならびに真言の力にて滅しむらん。

この責めは別の故無し、法華經誹謗の罪なり。

だいにちきょう  
ぎしゃく  
み  
きょう  
ほうおう  
ひほう

大日經の義釈を見るに、「この經はこれ法王の秘宝なり。」

この責めは別の故無し、法華經誹謗の罪なり。

みだりに卑賤の人々に示さず。釈迦世に出でて四十余年に、

舍利弗の慇懃の三請に因つて、方にために略して

妙法蓮華の義を説くが「」とし。今この本地の身、またこれ

妙法蓮華の最深秘処なるが故に。寿量品に云わく『常に  
靈鷲山および余の諸の住処に在り、乃至、我が淨土は毀  
れざれども、衆は焼け尽くと見る』。即ちこの宗の瑜伽の  
意なるのみ。また、補処の菩薩の慇懃の三請に因つて、方  
にためにこれを説く』等云々。

この釈の心は、大日經に本迹二門・開三顕一・開近顯  
遠の法門有り、法華經の本迹二門のごとし。この法門は  
法華經に同じけれども、この大日經に印と真言と相加わり  
て三密相應せり。法華經はただ意密ばかりにて、身・口の

にみつか  
二密闕けたれば、法華經をば略説と云い、大日經をば広説  
と申すべきなりと書かれたり。この法門、第一の誤り、謗法  
の根本なり。この文に二つの誤り有り。

また、義釈に云わく「この經は横に一切の仏教を統ぶ」  
等云々。大日經は当分・隨他意の經なり。誤つて隨自意・  
跨節の經と思えり。かたがた誤りたるを実義と思しめす  
故に、閻魔の責めをば蒙りたりしか。智者にて御座しませ  
し故に、この謗法を悔い還して法華經に翻りし故に、こ  
の責めを免るるか。

天台大師、釈して云わく「法華は衆經を總括す乃至  
軽慢止まざれば、舌口中に爛る」等云々。妙樂大師云わ  
く「已今當の妙、ここにおいて固く迷えり。舌爛れて止ま  
ざることは、なおこれ華報なり。謗法の罪は、苦長劫に流  
る」等云々。天台・妙樂の心は、法華経に勝れたる経有  
りと云わん人は無間地獄に墮つべしと書かれたり。善無畏  
三藏は、法華経と大日経とは理は同じけれども事の印・  
真言は勝れたりと書かれたり。しかるに、一人の中に一人は  
必ず惡道に墮つべしとおぼうるところに、天台の釈は

きょうもん ふんみよう ぜんむい しゃく きょうもん しようこみ  
経文に分明なり。善無畏の釈は経文にその証拠見えず。

うえ えんまおう せ とき わ ないしよう かんじん 思

その上、閻魔王の責めの時、我が内証の肝心とおぼしめす  
だいにちきょうとう さんぶきょう うち もん じゅ ほけきょう もん じゅ

免 せ 免 うたが ほけきょう しんごん 勝

この責めをまぬかれぬ。疑いなく、法華経に真言まさられり  
うたが ほけきょう しんごん うえ ぜんむいさんぞう ほけきょう だいにち

とおもう誤りをひるがえしたるなり。その上、善無畏三蔵

みでし ふくうさんぞう ほけきょう そ う た ほけきょう たほうぶつ だいにちきょう

の御弟子・不空三蔵の法華経の儀軌には、大日経・

こんごうちようきょう りょうぶ だいにち ほけきょう だいにち ほけきょう たほうぶつ

金剛頂経の両部の大日をば左右に立て、法華経・多宝仏を

ふに だいにち さだ りょうぶ だいにち そ う しんげ

ば不二の大日と定めて、両部の大日をば左右の臣下のごと  
くせり。

伝教大師は延暦二十三年の御入宋、靈感寺の順曉  
和尚に真言三部の秘法を伝わり、仏隴寺の行満座主に天台  
の宝珠をうけとり、顯密二道の奥旨をきわめ給いたる人。  
華嚴・三論・法相・律宗の人々の自宗我慢の辯執を倒し  
て天台大師に帰入せる由をかかせ給いて候。依憑集・  
守護章・秀句など申す書の中に、善無畏・金剛智・不空等  
は天台宗に帰入して、智者大師を本師と仰ぐ由のせられた  
り。

おのおのおも

しゅう

た

ほう

じゅう

讀

たしゅう

きら

つね なら

おも

ほうねん

れい

ひ

は常の習いなりと思えり。法然なんどは、またこの例を引いて、曇鸞の難・易、道綽の聖道・淨土、善導が正・雜二行の名目を引いて、天台・真言等の大法を念佛の方便と成せり。これらは牛跡に大海を入れ、県の額を州に打つ者なり。世間の法には、下剋上・背上向下は国土亡乱の因縁なり。仏法には、權小の經々を本として実經をあなずる、大謗法の因縁なり。恐るべし、恐るべし。

嘉祥寺の吉藏大師は三論宗の元祖、ある時は一代聖教を五時に分け、ある時は一二藏と判ぜり。しかりといえども、

竜樹菩薩造の百論・中論・十二門論・大論を尊んで、  
般若經を依憑と定め給い、天台大師を辺執して過ぎ給い  
しほどに、智者大師の梵網等の疏を見て少し心とけ、よう  
よう近づいて法門を聴聞せしほどに、結句は一百余人の  
弟子を捨てて、般若經ならびに法華經をも講ぜず、七年に  
至つて天台大師に仕えさせ給いき。高僧伝には「衆を散じ、  
身を肉橋と成す」と書かれたり。天台大師、高坐に登り給  
えば、寄つて肩を足に備え、路を行き給えば、負い奉り給  
いて堀を越え給いき。吉藏大師程の人だにも、謗法をおそれ

てかくこそつかえ給いしか。しかるを、真言・三論・法相等の宗々の人々、今すえずえに成つて辺執せさせ給うは、自業自得果なるべし。

今の世に淨土宗・禪宗など申す宗々は、天台宗に  
おとされし真言・華嚴等に及ぶべからず。依經既に  
楞伽經・觀經等なり。これらの經々は仏の出世の本意  
にもあらず、一時一会の小經なり。一代聖教を判ずる  
に及ばず。しかも彼の經々を依經として、一代の聖教を  
聖道・淨土、難行・易行、雜行・正行に分かつて、「教外

に別伝す」なんどのののしる。譬えば、民が王をしえたげ、小河  
の大海を納むるがごとし。かかる謗法の人師どもを信じて  
後生を願う人々は、無間地獄脱るべきや。しかれば、当世の  
愚者は、仏には釈迦牟尼仏を本尊と定めぬれば自然に不孝  
の罪脱れ、法華経を信じぬれば不慮に謗法の科を脱れたり。  
その上、女人は、五障三従と申して、世間・出世に嫌わ  
れ、一代の聖教に捨てられ畢わんぬ。ただ法華経ばかり  
にこそ、童女が仏に成り、諸の尼の記別はさずけられ  
て候いぬれば、一切の女人はこの経を捨てさせ給いては

いづれの經をか持たせ給うべき。天台大師は震旦國の人、  
ほとけ  
めつごいっせんごひやくよねん  
ほとけ  
おんつか  
ほま  
ほけきょう  
さんじつかん  
もん  
しる  
たも  
もんぐ  
もう  
ふみ  
だいしち  
まき  
たきよう  
なんし  
よきよう  
うんぬん  
ゆる  
かな  
によにん  
あた  
とう  
き  
によ  
き  
第七の卷には「他經は、ただ男にのみ記して女に記せず」等  
云々。男子も余經にては仏に成らざれども、しばらく与え  
てそれをば許してん。女人においては、一向諸經において  
は叶うべからずと書かれて候。たとい、千万の經々に  
によにんな  
か  
そうちろう  
せんまん  
きょううぎょう  
ほけきょう  
きら  
なん  
たの  
あ  
ば、何の憑みか有るべきや。

きょうしゅしゃくそん わ しょきょうしじゅうよねん きょうぎょう  
教主釈尊、我が諸経四十余年の経々を「いまだ真実  
を顕さず」と悔い返し、涅槃經等をば「当説」と嫌い給い、  
むりようぎきょう あらわ  
無量義經をば「今説」と定めおき、三説にひでたる法華經に  
こんせつ さだ 置 さんせつ 秀 とうせつ きら たま  
「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」「世尊は法  
久しくして後、要らず当然に真実を説きたもうべし」と釈尊宣  
ひき のち からら まさ しんじつ と  
べ給いしかば、宝淨世界の多宝仏は大地より出でさせ給い  
たま たま たま たま たま  
て真実なる由の証明を加え、十方分身の諸仏は広長舌を  
ぼんてん つ たも じっぽうせかいみじんじゅ しょぶつ おんした こうちようぜつ  
梵天に付け給う。十方世界微塵数の諸仏の御舌は、不妄語戒  
ぼんてん つ たも じっぽうふんじん しょぶつ おんした ふもうごかい  
の力に酬いて八葉の赤蓮華においでさせ給いき。一仏・  
ちから むく はちよう しゃくれんげ 生 出 たま いちぶつ

二仏・三仏、乃至十仏・百仏・千万億仏、四百万億那由他女人成仏の義なり。

の世界に充满せりし仏の御舌をもつて定めおき給えるによんじょうぶつ　ぎ

謗法無くしてこの経を持つ女人は、十方虚空に充满せる慳貪・嫉妬・瞋恚・十惡・五逆なりとも、草木の露の大風にあえるなるべし。三冬の氷の夏の日に滅するがごとし。

ただ滅し難きものは、法華経謗法の罪なり。譬えば、三千大千世界の草木を薪となすとも、須弥山は一分も損じ難し。

たとい七つの日出でて百千日照らすとも、大海の中をば

乾

かわかしがたし。たとい八万聖教を読み、大地微塵の塔婆はちまんしょうぎょうを立て、大小乘の戒行を尽くし、十方世界の衆生を一子よのごとくになすとも、法華經謗法の罪はきゆべからず。我ら、過去・現在・未来の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは、ひとえに法華經誹謗の罪なるべし。女人と生まれて百惡身に備うるも、根本この經誹謗の罪より起これだいしょうじょうり。

されば、この經に値い奉らん女人は、皮をはいで紙とかわなし、血を切つてすみとし、骨を折つて筆とし、血のなんだかみ涙なみだ墨ぼく。

すずり

みず

書

飽

期

を硯の水としてかきたてまつるとも、あくこあるべからず。  
いかにいわんや、衣服・金銀・牛馬・田畠等の布施をもつ  
て供養せんは、もののかずにてかずならず。

くよう

物

数

えふく

きんぎん

ぎゅうば

でんぱたとう

ふせ